

ブックレビュー



『牧野富太郎

～雑草という草はない～日本植物学の父』

青山 誠 著

角川文庫 刊

定価 836円 (本体760円+税)

座右の書に『牧野 新日本植物圖鑑』(図鑑の北隆館)がある。初版発行が1961年。手元の蔵書は、1974年発行の27版だ。定価8,000円だったが、彼女からのプレゼントだった。ひとり老境に至った今は、日々の「徘徊」に見かける草花の名を探るときに役立っている。

「好きこそ物の上手」を極めた牧野富太郎(1862～1957)は、「日本植物学の父」として知られる。生涯で1,500種類以上の新種を発見し、40万点を超える植物標本を残した。その「一途な情熱」が牧野の奔放な人生を彩っている。金銭感覚のない牧野の身边に生きた人々の献身や支援も鮮烈だ。

わけても「恋女房」の存在は大きかった。13人の子宝に恵まれた妻・寿衛子(1873～1928)は「火の車」の家計を預かり、家庭を顧みず研究に没頭する牧野を終生支えた。暮ら

しのために借家を借り、「待合」を営む商才も発揮。「道楽息子を一人抱えているようなものですよ」というのが彼女の口癖だったという。寿衛子亡き後は、娘(次女)の鶴代が牧野の世話をした。

牧野は土佐国佐川村(高知県高岡郡佐川町)の裕福な造り酒屋の跡取り息子に生まれた。幼くして両親と死別し、祖母・浪子の「秘蔵の子」として育てられた。好きな植物採集に熱中した牧野は小学校を中退。家業や家産からも自らを解き放ち、放蕩を尽くして生涯を植物学に捧げた。後年に「私は植物の愛人として生まれた。あるいは草木の精かも知れん」という名言を残している。学位には拘泥しなかったが、東京帝大から理学博士号を授与される。

全力疾走するその天真爛漫な半生が、2023年前期のNHK「朝ドラ」になった。本書は「世の中に雑草という草はない」と唱えた牧野の「波乱万丈」を追跡する文庫書き下ろしだ。
(山海野^{さんかいの} 玄^{げん})